# 東京語における非典型的疑問文の韻律特徴

中川　千恵子

要旨

東京語の疑問文は文末上昇調であることが多い。しかし、文末下降調でも疑問文である場合がある。探していた人を目の前にして用いられる「ここにいたの。」という文は、真偽を問う〈典型的な疑問文〉ではなく、情報はすでに話し手にある〈非典型的な疑問文〉と言えるが、スペイン語においても同様の種類の疑問文があり、〈相対疑問文〉という名を持ち、文末は下降調をとる。「ここにいたの。」の東京語の実際の発話を観察した結果、文末上昇調と文末下降調があり、文末下降調でも〈平叙文〉と異なる韻律特徴を持つことがわかった。また、その実際の発話の聴取実験を行なった結果、文末下降調でも疑問文であると30%以上の人が判断する発話があった。スペイン語母語話者である学習者の聞き取りにおいては、日本人が10%しか疑問文と判断しない発話でも、30%の人が疑問文と聞き取っており、スペイン語母語話者と東京語話者は部分的に聞き取り方が違うことがわかった。

【キーワード】典型的疑問文　非典型的疑問文、相対疑問文
文末上昇調　文末下降調

## 0.　はじめに

近年、日本語教育において、音声教育、とくに韻律教育の重要性が叫ばれている。しかし、現場では、十分な教育が行なわれているとは言いがたい。それは、授業時間・教材の不十分さに起因する一面もあろうが、シラバス作成上、基礎となるような研究が不足していることも原因といえるだろう。また、研究があっても、それを教育に結びつける難しさもある。実際の教育現場にいるものにとってわかりやすく、とりこみやすい研究成果をあげる必要がある。

日本語の韻律については、文部省重点領域研究「日本語音声」（1989-1992 代表：杉藤美代子）において研究成果があげられた。対照研究班（

Ｄ１班）では、パソコンソフト「音声録聞見」（今川・桐谷 1989）を使用し、ピッチ曲線を抽出分析することで、東京語と学習者の母語それぞれの韻律について対照研究を行なってきた。とくに東京語の疑問文については、鮎澤（1992）が典型的な疑問文（Yes-No,WH,AorB選択等）の韻律特徴を明らかにし（注1）、学習者についても、中川・鮎澤（1994）でスペイン語母語話者と比較対照研究を行なっている。しかし、典型的ではない疑問文の韻律研究については、まだまだ十分な研究があるとはいえない。そこで本研究では、典型的ではない疑問文の一種を扱うことにした。

本研究は前述の対照研究に続くものであり、スペイン語の韻律研究を参考にするが、東京語の韻律の一部を明らかにするのが目的である。スペイン語の研究に、広くイントネーション全般について実際の発話を観察し分類・記述した研究がある（Navarro Tomás 1974 注2）が、本研究のテーマとしようとする典型的ではない疑問文についての記述に、日本語と比較対照して見ると興味深い共通点が見られ、研究の参考となると考えたためである。

1. 研究の概要

東京語では、文末下降調イントネーションが平叙文を、文末上昇調イントネーションが疑問文を表すと漠然と考えられている。しかし大石(1965:81）の報告によると、疑問文の３分の１が文末下降調であるという。

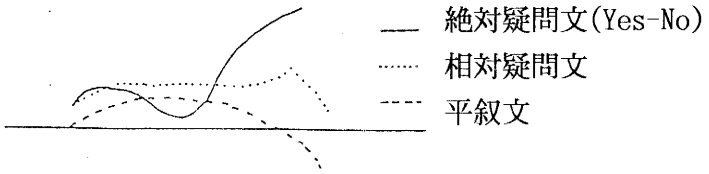
鮎澤によると、典型的な疑問文（Yes-No,WH,AorB選択）については、文末１モーラでのピッチの急上昇が特徴であるが、その他典型的でないと思われる疑問文についてはどうであろうか。

探していた人を目の前にして用いる「ここにいたの」は、井上（1991:35-41）によると、文末下降調であれば〈自問納得〉であるが、文末上昇調であれば、「発話直前に見たり聞いたりして知らされた情報」により「事実であることが確定している」ことがらを疑問の対象としており、談話を進めるための機能を持つ〈疑問文〉の一種である。これを井上は〈受信情報の疑問文〉と名付けている。井上は、

文末下降調は〈自問納得〉であるとしているが、野田(1993:46)は、相手に確認するような場合下降調で発話され、その場合は典型的な疑問文に近いと述べている。

また、スペイン語においても、この〈受信情報の疑問文〉と重なるような疑問文の分類がある。Navarro Tomásおよび Canellada & Madsen(1987)によると、スペイン語の疑問文には、Preguntas Relativas〈相対疑問文〉という分類があり、固有のイントネーション特徴を持つ。この疑問文は話し手が聞き手の答えを大体予測している場合に使用され、次のようなイントネーションの型を持つ。

図1　スペイン語の疑問文イントネーションの型(Canellada & Madsen: 151)




点線の〈相対疑問文〉は、最初から最後まで破線の〈平叙文〉より高いピッチを保持し、最後にアクセントの置かれる音節でさらに高くなり、急下降するパターンをとっている。

このように、〈受信情報の疑問文〉に似た意味を持つスペイン語の〈相対疑問文〉は、文末下降調をとるが、〈平叙文〉とは異なる韻律特徴を持つ。また、聞き取りにおいてもそのイントネーションは〈平叙文〉ではなく〈相対疑問文〉と判断されることが多い（泉水 1995 註3）。このスペイン語の〈相対疑問文〉の韻律特徴は、日本語（東京語）においても共通点があるのではないかと思われる。

本研究では、井上のいう「ここにいたの。」という文が疑問文としてどんな意味を持ち、東京語ではどんな韻律特徴を持つかを調べ、文末下降調をとるとしたら、それが疑問文と聞き取られるのかどうかについて確かめることを目的とする。その際、日本語学習者であるスペイン語母語話者についても同様に聞き取るかどうかを調べることにする。

## 2. 研究方法

(1) 先行研究等から、疑問文および疑問文の韻律特徴について調べ、「ここにいたの？」という文がどんな場面で用いられ、どんな意味を持ち、どんなイントネーションを持ち得るかについて考察する。

(2) 実際に「ここにいたの」という文がどんなイントネーションを実現しているかを観察するため、音声資料を録音し、「音声録聞見」でピッチ曲線を抽出し分析する。

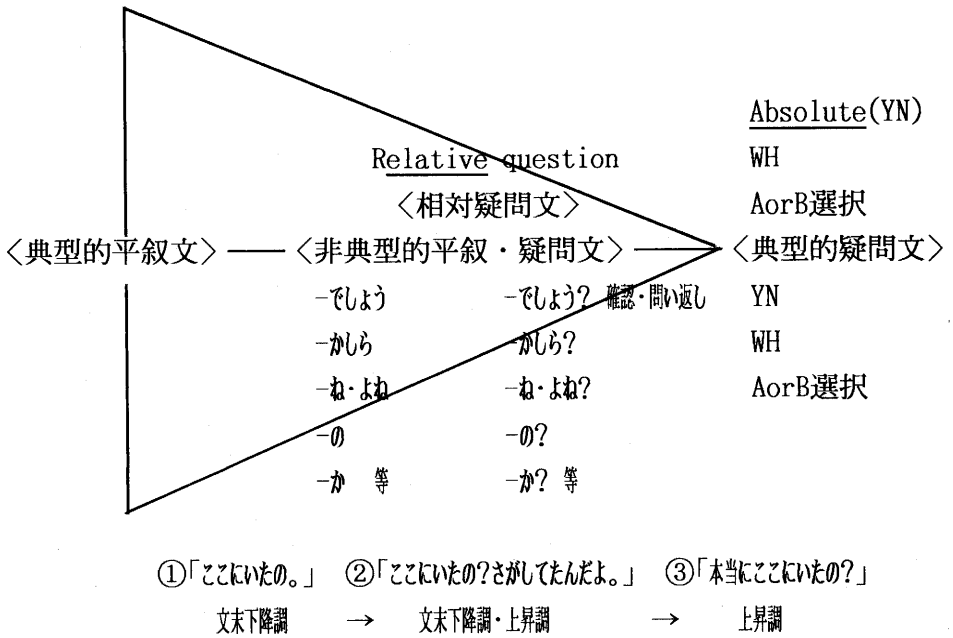
(3) さらに、(2)を確かめるために聴取実験を行なう。実験対象者は東京語話者と日本語学習者であるスペイン語母語話者とする。

## 3. 疑問文とそのイントネーション

### 3.1 平叙文と疑問文

疑問文の定義、分類、意味等についてはさまざまな説がある。そこで諸説を検討した結果、本論文ではカテゴリーに分類するより、典型的な平叙文と典型的な疑問文とは直線的な連続線上にあり、その間にどちらとも分けがたいもの（〈非典型的平叙・疑問文〉という名を使う）が存在すると考え、次のような図を描くことで平叙文と疑問文の関係を示した（注4）。この図では、広く疑問表現としての「疑問文」ということばを使用し、Yes-No, WH, AorB選択疑問文等をプロトタイプの〈典型的な疑問文〉と考えることにする（注5）。

図2 疑問文の図



上の部分はスペイン語、下の部分は日本語に対応し、この図について以下のように解釈することができるだろう。

(1) 左は対自的、右へ動くに従って対他的となると考えられる。

(2) 断定の度合い：左から右に断定度は弱まり、断定→推定→推量→疑問と変化する（註6）。

(3) 情報量：左よりは話者、右よりは聞き手の情報量が多いと考えられ、その量の多少は三角形で表される（註7）。

(4) イントネーション：　左は平叙文であり文末下降調が典型であるが、右は疑問文であることから文末上昇調になることが多い。典型的でないその間の場合は、どちらの型もとりうるが、終助詞との関係を見る必要がある。

### 3.2　「ここにいたの。」はどんな文であるか

図２の三角形の下に「ここにいたの。」という文がどんな位置を占め得るかをイントネーションの型とともに示した。

田野村（1990:55）によると、「のか」という疑問文は、一般にその答がすでに定まっている状況であるという制約性がある。「話し手情報が不確定」で、「聞き手に情報があると仮定」したとき用いられるのが〈典型的疑問文〉であるとすると、「話し手情報が確定」していて「聞き手に情報があると仮定」していて用いられる〈受信情報の疑問文〉は、〈非典型的疑問文〉の一種と言ってよいだろう（註8）。

しかし、「本当に（おばけが）ここにいたの？」と尋ねる場合と、「おや、どこにいるかと思ったら、ここにいたの？探してたんだよ。」という場合では、「事実が確定」という点について言えば、「確定」の度合いは違うだろう。前者は、〈典型的疑問文〉に限りなく近く、「の」の性質も終助詞と言えるか、あるいは終助詞に近いものと言えるだろう(野田:49)。文末イントネーションも上昇調をとることが多いと推測される。そこで、本稿では便宜的に前者を〈近典型的疑問文〉後者を〈非典型的疑問文〉と呼ぶことにする。

## 4.　「ここにいたの」の発話の分析

### 4.1　発話資料

以下は「ここにいたの」の３つの状況と会話文である。
①〈平叙文〉：答え、あるいは自分がどこにいたかを説明するため用いる文。下降調。「連休なにしてたの？」→「ここにいたの。」
②〈非典型的疑問文〉：探していた人を目の前にして発する疑問文。〈受信情報の疑問文〉にあたる。文末は上昇・下降２種あると推測される。
（探していた太郎をみつけて）「ここにいたの？探してたんだよ。」
③〈近典型的疑問文〉：本当にいたかどうかを尋ねる疑問文。文末は上昇調が多いと思われる。〈典型的疑問文〉に近い。
（本当におばけが）「ここにいたの？」

資料提供者には、この３つの状況を読み理解した上で下線部分を１～４回発話してもらった。録音はソニーカセットテープレコーダーTC-D5Mとソニータイピンマイク ECM-T110を使用した。録音場所は、大学研究室か教室である。

文末上昇・下降の指定をせずに発話してもらった場合、まず①の〈平叙文〉は全員が下降調をとり、③の〈近典型的疑問文〉は１名を除き上昇調をとった。②の〈非典型的疑問文〉については、全員がまず文末上昇調をとったが、文末下降調をとる場合はないかと聞いたところ、全員が文末下降調もとりうると答えたので、文末下降調の場合も発話してもらった。

### 4.2　資料提供者

標準的な東京語話者と判断した男性2名(M1,M5)女性3名(F2,F3,F4)の計５名である。男性は50～60代の日本語関係の大学教員、女性は30代の日本語教師。

### 4.3　分析結果

「音声録聞見」でピッチ曲線を抽出し分析した結果を以下にあげる。

#### 4.3.1　ピッチパターンの図

次の図は、図3～5は男性M1の、図6～7は女性F2のイントネーションのピッチ曲線であり、他の３名も似たようなパターンを描いていたので、代表的なものとしてあげた。縦軸は対数表示による基本周波数（Hz）、横軸は

時間軸で目盛りは250msecである。

図3 平叙文(M1)

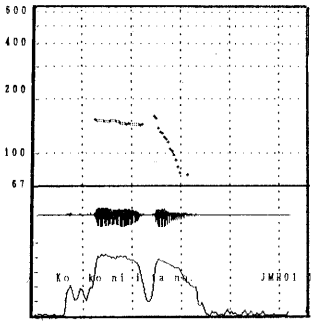



図4 文末下降調非典型的疑問文(M1)

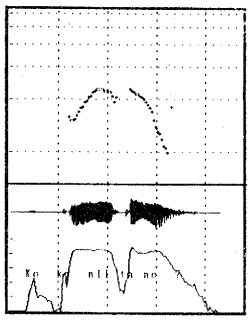


図5 文末上昇調非典型的疑問文(M1)

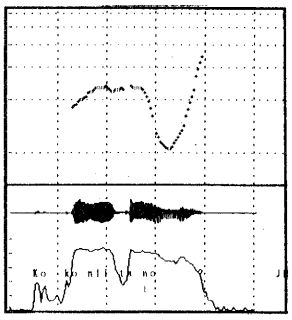


図6 平叙文(F2)

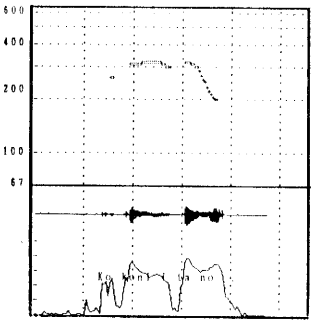



図7 文末下降調非典型的疑問文(F2)

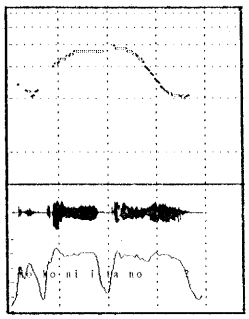
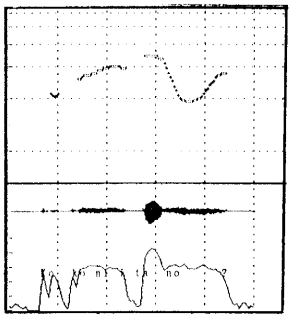


図8 文末上昇調近典型的疑問文(F2)



4.3.2　分析結果

このピッチ曲線から、以下が観察された。

(1)　句頭の上昇が1拍目から2拍目にかけて観察されるが、無声化のため「こ」のピッチがはっきり見えない発話もある。

(2)　ピッチパターン：「の」の前までは、平叙文、疑問文を問わず、急な山、なだらかな山の違いはあるが、同じような型である。上昇調の場合は「の」の拍内で下降－上昇する。アクセント型は保持されている。

(3)　高さ：〈非典型疑問文〉は、文末上昇調・下降調を問わず、〈近典型的疑問文〉〈平叙文〉より高く、ピッチ幅も大きい発話が多かった（表1）。

(4)　長さ：「の」の長さは、〈疑問文〉のほうが〈平叙文〉より長い（表2）。

表１「ここにいたの」高さ：最高値と最低値の平均値、（）内はその差であるピッチ幅、単位はHz。

| | 文末下降調 | | | 文末上昇調 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | (1)平叙文 | (2)非典型的疑問文 | (3)近典型的疑問文 | (2)非典型的疑問文 | (3)近典型的疑問文 |
| M1 | 152<br>(67)<br>85 | 208<br>(114)<br>94 | 164<br>(95)<br>69 | 231<br>(126)<br>105 | --- |
| F2 | 319<br>(123)<br>196 | 393<br>(201)<br>192 | --- | --- | 349<br>(161)<br>188 |
| F3 | 302<br>(181)<br>121 | 399<br>(247)<br>152 | --- | 367<br>(189)<br>178 | 268<br>(127)<br>141 |
| F4 | 319<br>(129)<br>190 | 389<br>(245)<br>154 | 220<br>(69)<br>151 | 395<br>(224)<br>171 | 225<br>(81)<br>144 |
| M5 | 139<br>(66)<br>73 | 199<br>(106)<br>93 | --- | 195<br>(96)<br>99 | 202<br>(122)<br>80 |

表２「ここにいたの」の「の」の長さ：単位はmsec。

| | 文末下降調 | | | 文末上昇調 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | (1)平叙文 | (2)非典型的疑問文 | (3)近典型的疑問文 | (2)非典型的疑問文 | (3)近典型的疑問文 |
| M1 | 110 | 250 | 220 | 310 | --- |
| F2 | 160 | 320 | --- | --- | 320 |
| F3 | 210 | 420 | --- | 360 | 340 |
| F4 | 120 | 400 | 120 | 320 | 310 |
| M5 | 120 | 230 | --- | 300 | 270 |

以上のように〈平叙文〉〈非典型的疑問文〉〈近典型的疑問文〉のピッチ曲線、高さ、長さ等を検討した結果、それぞれの文に異なる特徴が見られた。とくに、文末下降調の〈非典型的疑問文〉と〈平叙文〉は、同じようなピッチパターンであるが、前者のほうが最高値が高いこと、ピッチ幅が大きいこと、「の」が長いこと等が異なる点であった。

また、この文末下降調〈非典型的疑問文〉「ここにいたの？」の型は、〈平叙文〉より高いピッチであること、平板型の語の連続であるため、その高いピッチを「た」まで平坦に維持し、「た」から「の」にかけて急下降することから、スペイン語の〈相対疑問文〉の型に似ていると言える。

## 5. 聴取実験

4.の結果から、〈非典型的疑問文〉「ここにいたの」は、文末上昇調とともに下降調もとることがあり、同じ文末下降調でも〈平叙文〉と異なる韻律特徴があることが確認された。しかし、自然発話ではなく、資料提供者の内省ののちの発話であるため、実態はどの程度文末下降調で発話しているかはわからない。また、聞き手が話し手の意図どおり聞き取るかどうかもわからない。実態についてとらえるのは難しいため、今回は扱わないことにするが、聞き手が発話を意図どおりに知覚しているかどうか確かめるために聴取実験を行なうことにした。その際、日本語学習者についても日本人とおなじように聞き取るかどうかを調べる必要があると考え、聴取実験に学習者グループを含めることにした。

### 5.1 実験の手順

図3～8の男女各1名のピッチパターンの合計6発話を、アトランダムにそれぞれを全部で6回聞くように聴取実験用刺激文テープを作成した。まず男性の3発話を聞いて次に女性の3発話を聞くものと、反対に男性発話から女性発話の順で聞くものの、２つのタイプのテープを用意した。テストの指示としては、「なにか聞かれて、はいとかいいえの答えを要求されていると直観的に思ったときは、疑問文であるとマークしてください」とし、答えは「疑問文」か「疑問文ではない」の選択とした。

### 5.2 実験対象者

日本人は東京語母語話者である大学生52名（男13名、女39名）、学習者はラテンアメリカ人も含むスペイン語母語話者22名（男10名、女12名）である。スペイン語母語話者を選んだ理由は、スペイン語の〈相対疑問文〉が文末下降調である東京語の〈非典型的疑問文〉のピッチパターンに似ていることから、それが干渉する可能性があるのではないかと考えたためである。

5.3　結果

表3　聴取実験結果

| | 文末下降調 | | | | 文末上昇調 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平叙文 | | 非典型的疑問文 | | 非典型的疑問文 | 近典型的疑問文 |
| | 疑問文でないと答えた | | 疑問文と答えた人 | | 疑問文と答えた人 | |
| | 男声 | 女声 | 男声 | 女声 | 男声 | 女声 |
| 日本人 | 88% | 98% | 33% | 10% | 95% | 97% |
| スペイン語話者 | 97% | 95% | 39% | 30% | 98% | 92% |

(1)　日本人もスペイン語母語話者も、大体90%以上の人が文末下降調平叙文（図3,6）は 疑問文ではないと、文末上昇調疑問文（図5,8）は疑問文であると知覚した。

(2)　日本人もスペイン語母語話者も、30%以上の人が男性の声の文末下降調〈非典型的疑問文〉（図4）は、疑問文であると判断した。

(3)　女性の声の文末下降調〈非典型的疑問文〉（図7）については、日本人とスペイン語母語話者の間に知覚の差が見られた：日本人は〈疑問文〉であると判断した人は10%に過ぎなかったが、スペイン語母語話者では30%の人が〈疑問文〉であると判断した。

5.4　分析

5.3(1)の結果から、〈平叙文〉と文末上昇調〈典型的疑問文〉は、日本人もスペイン語母語話者も意図どおり聞き取ることが多く、大体同じような知覚をするということがわかった。

文末下降調〈非典型的疑問文〉については、日本人もスペイン語母語話者も共通する5.3(2)の結果は、この文末下降調〈非典型的疑問文〉がはっきり〈疑問文〉とも〈平叙文〉（疑問文ではない）とも判断されないということを示している。図2で示した〈典型的疑問文〉と〈典型的平叙文〉の中間的位置と重なるものであり、〈非典型的疑問文〉の位置とあいまい性を表す示唆的な結果であると言えよう。

同じ文末下降調〈非典型的疑問文〉でも5.3(3)の結果のように、日本人とスペイン語母語話者の間には違いが見られる発話があった。このように差がでた理由はいろいろ考えられる。日本人の場合は、女性の声のピッチ差（最高値と最低値の差）が男性の声ほど大きくないため意図どおりに聞き取らなかった可能性がある（男性の声のピッチ幅が14半音以上あるのに対し、女性の声のは12半音程度の幅であった）。また、スペイン語母語話者の場合は、〈相対疑問文〉の型の干渉があったため、この型に敏感に反応したという可能性も考えられる。いずれにせよ、東京語話者とスペイン語母語者では知覚の違いがある場合があるということがわかった。

## 6. まとめと今後の課題

探していた人を目の前にした時用いられる「ここにいたの。」という文が、〈典型的平叙文〉と〈典型的疑問文〉の間にある〈非典型的疑問文〉であることについて考察し、東京語における韻律特徴を調べた結果、文末上昇調だけでなく、文末下降調をとることがあり、平叙文の下降調の韻律特徴とは異なっているということがわかった。また、聴取実験を行なった結果、平叙文とは聞き取らず、平叙文とも疑問文とも言えない中間的な文末下降調疑問文があることが確かめられた。また、今回はスペイン語母語話者だけに限ったが、学習者による聞き取り方の違いが一部にあることもわかった。この結果をふまえ、疑問文は文末上昇調ばかりではないこと、学習者によって聞き取り方が異なることに留意して韻律教育にあたる必要があるだろう。

今回は、発話意図がどう受け取られているかについて調べなかったが、今後それを調べることで、各発話の違いを比較検討してみたいと考えている。スペイン語母語話者以外についても調べる必要があるだろう。また、他の〈非典型的疑問文〉の韻律特徴についても扱いたい。

(注1)鮎澤(1992)、中川・鮎澤(1994)では、疑問文について「音声録聞見」でピッチ曲線を抽出し、分析検討した結果、疑問文イントネーションの特徴を次のように記述している。疑問文の特徴は、文末１モーラでのピッチの急上昇にあり、Yes-No疑問文の文末は２モーラ以上の語がある場合は、アクセント型との関係で２種類のパターン（一旦下降して上昇するパターンと下降のないパターン）がある。WH疑問文では、疑問詞にピッチのピークがあり、そのあとのピッチ上昇は抑制される。また、AorB選択疑問文ではAとB両方の文末で上昇する。

(注2)本研究では1974年度版を参考にしたが、すでに1944年に出版されている。スペイン語のイントネーション全般を網羅して実際の発話を分析記述している。

(注3)泉水はイントネーションだけを聞き取る聴取実験を行なったが、〈相対疑問文〉に関しては正答率が60％以上という結果であった。

(注4)国立国語研究所(1960)、南不二男(1985)、仁田義雄(1987)を中心に諸説を取り入れている。

(注5)益岡隆(1987)のプロトタイプ論をとりいれている。カテゴリーに分類しようとすると、どうしてもあいまいなものが問題となってくる。その問題を解決するため、典型的な平叙文と疑問文のプロトタイプを考えると、両者はあきらかに対立関係にあり、混同されないが、このプロトタイプから遠ざかれば遠ざかるほど、対立の度合いは低下し、「あいまいさ」が生じることになる。

(注6)『日本語百科事典』(1988: 212右欄)では、判断の表現は「～なのだ」という確信に満ちた「断定」から、不確かであるがなんらかの根拠に基づいた判断を表す「推定」、より不確かな「推量」、そしてさらに判断が不確かになり、ついに判断そのものが不可能になった「疑問」につながるとある。

(注7)森山(1989)は、話し手が「聞き手に情報があると仮定する」場合を［聞き手配慮］と名付けている。〈典型的疑問文〉は、［話し手情報が不確定］で［聞き手配慮］の場合である。

(注8)森山の説を参考にしている。

参考文献：

鮎澤孝子(1992)「日本語の疑問文の韻律的特徴」文部省重点領域研究『日本語音声』Ｄ１班1991年度研究成果報告書、1-20.
井上優(1991)「受信情報の疑問文」日本語シンポジウム『言語理論と日本語教育の相互活性化』予稿集、35-41.
今川博・桐谷滋(1989)「ＤＳＰを用いたピッチ、フォルマント実時間抽出とその発音訓練への応用」電子情報通信学会技術報告SP89-36,17-24.
大石初太郎(1965)「疑問表現の文末音調」日本語音声学編『音声の研究11』、77-90.
Canellada, M.J. y Madsen, J.K.(1987) "Pronunciación del español" Madrid: Gredos.
国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)－対話資料による研究－』秀英出版.
泉水浩隆(1995)「スペイン語疑問文イントネーションに関する一考察－知覚実験を通して－」日本音声学会　第291回研究例会発表原稿.
田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ｉ「のだ」の意味と用法』和泉書院.
中川千恵子(1995)「疑問文イントネーションの種類について－スペイン語と日本語の対照－」横浜国立大学留学生センター紀要第２号、64-78.
中川千恵子・鮎澤孝子(1994)「スペイン語母語話者の日本語発話における韻律特徴」平成６年度日本語教育学会春季大会予稿集、55-60.
Navarro Tomás, T.(1974) "Manual de entonación española" Madrid: Guadarrama 4ed.
仁田義雄(1987)「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』大学書林、179-202.
日本語百科大事典(1988)北原保夫編「判断の表現」大修館、212右欄.
野田春美(1993)「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐって」日本語学12巻10号　明治書院、43-50.
益岡隆志(1987)「プロトタイプ論の必要性」月刊言語16巻12号、38-45.
南不二男(1987)「質問文の構造」朝倉日本語新講座『文法と意味Ⅱ』朝倉書店、39-74.
森山卓郎(1989)「コミュニケーションにおける聞き手情報－聞き手情報配慮の理論－ 」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版、95-120.